



平成31年 1月4日発行

発行者
公益社団法人 新潟県植物防疫協会

〒951-8133

新潟市中央区川岸町三丁目21番地3

☎ 025 (233) 2839

FAX 025 (233) 8018

《主な内容》

- 平成30農薬年度水稲農薬の出荷動向…………… 1
- 新潟県におけるダイズカメムシ類の発生状況および簡易調査に向けた取り組み …… 2
- AIを活用した病害虫診断技術の開発について …… 3
- 平成30年度主要農作物病害虫の発生概況…………… 4
- 「農薬実証ほ成績の概要について」…………… 5
- 村上市朝日地区における無人ヘリコプターとドローンを用いた共同防除体制について… 6

平成30農薬年度 水稲農薬の出荷動向

平成30農薬年度（平成29年10月～平成30年9月）の本会出荷実績にもとづき防除面積を算出しました。

育苗箱処理剤も含めた本年度水稲農薬の延べ防除面積は19,822ha、前年比99%となり、ほぼ前年並みで推移しました。

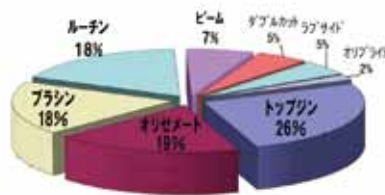
1. いもち病防除剤の出荷実績

本年度のいもち病防除面積は、60,376ha、前年比92%となりました。

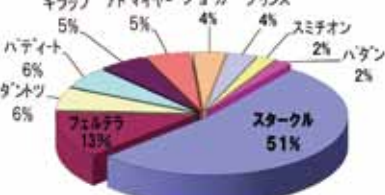
薬剤別では、「トップジン剤」をはじめ、「オリゼメート剤（Dr. オリゼ含む）」「ブラシン剤」が、昨年に引き続き大きくシェアを占めています。

育苗箱処理の分野では、近年、「ルーチン剤」が伸張傾向にあり、紋枯病との同時防除をねらった混合剤が中心となっています。

平成30農薬年度 いもち病防除実績（成分別）



平成30農薬年度 害虫防除面積（成分別）



【参考】
本稿には記載していませんが、作付品種の構成、現場からの防除要請等を受け、育苗箱処理を含めて紋枯病の防除面積が増加しています。

2. 害虫防除剤の出荷実績

本年度の害虫防除面積は153,045ha、前年比101%となりました。

薬剤別で見た場合、本田カメムシ防除を中心に「スタークル剤」、育苗箱処理での「フェルテラ剤」、これら2剤を主力とした防除対応がとられています。

育苗箱処理の分野では、新たに「パディート剤」の使用が増加傾向にあり、

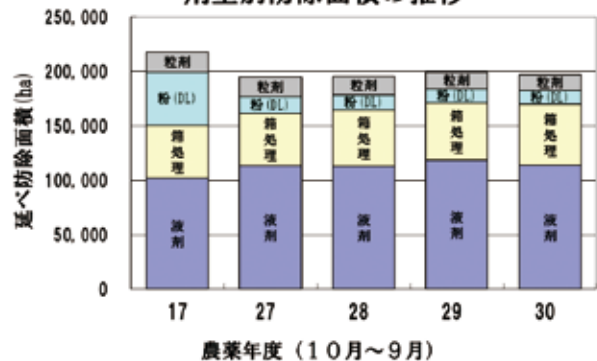
また、初期害虫をターゲットとした安価な薬剤も一部地域で普及がすすんでいます。

3. 剤型別の出荷動向

剤型別に比較した場合、液剤が113,952ha（前年比96%）、粒剤が14,545ha（前年比94%）、粉剤（DL）が12,147ha（前年比96%）、育苗箱処理剤が56,178ha（前年比107%）となりました。

近年の傾向として、粒剤や粉剤（DL）の使用が減少し、液剤や育苗箱処理剤の活用が増加しています。これは、コスト面や作業の省力化がはかれると同時に、作付品種の構成や防除体制の変化などの要因が考えられます。

剤型別防除面積の推移



4. おわりに

今日、消費者の「食の安全性と信頼性」への関心はいつそうの高まりを見せ、多様化してきています。

こうしたなか、私ども本県農業関係者としては、広く消費者のニーズに応えるべく、新潟米をはじめとした県内農作物の「高品質かつ安定的な生産・供給体制」を構築していく必要があります。

近年、低コスト・省力化農業に向けた取り組みとして、密苗やトラクターの自動運転化、ドローンによる自動散布など、将来の日本農業を考えるうえで、明るいニュースも増えてきました。

厳しい状況下にある農業現場ですが、次世代技術の導入検討をおこない、できるだけ農業従事者の作業負担を減らす一方、精度の高い病害虫発生予察をもとに、実態に即した防除方法を適宜、選択・実施することが求められています。（全農新潟県本部 肥料農薬総合課 渡辺 優斗）

新潟県におけるダイズカメムシ類の発生状況および簡易調査に向けた取り組み

1. ダイズカメムシ類

ダイズを加害するカメムシ類は6科31種が報告されていますが、主な加害種としては、ホソヘリカメムシ（図1）、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ（図2）などが挙げられます。これらの主要種以外にもブチヒゲカメムシやクサギカメムシなどがダイズを加害します。また、近年は温暖化に伴うミナミアオカメムシによる被害も全国的に問題となっています。いずれのカメムシもダイズの子実を加害することにより扁平粒や奇形粒を生じ（図3）、品質や収量の低下をもたらします。加害が激しい場合は、茎葉がいつまでも緑色のまま落葉せず青立ちといった状態となります。



図1 ホソヘリカメムシ成虫



図2 アオクサカメムシ幼虫



図3 ダイズカメムシ類による被害

2. 新潟県におけるダイズカメムシ類の発生状況

新潟県内のダイズ圃場で発生しているカメムシ種をいくつかの地域で調査したところ、多くの地域・圃場で優先していたのはホソヘリカメムシでした。多くは

ありませんが、アオクサカメムシやイチモンジカメムシが優先していた圃場もありました。また、斑点米カメムシとして有名なオオトゲシラホシカメムシが多くのダイズ圃場で認められ、子実への被害も確認されたことから、水稻だけでなくダイズにも被害をもたらしていることが明らかになってきました。

2017年の上越地域の被害調査では、調査を行った4圃場中3圃場で被害粒率が10%を超えており、うち2圃場では20%を超える大きな被害が認められました。近年、栽培品種が「エンレイ」から晩生の「里のほほえみ」に置き変わっており、発生時期の晩期化が想定されることから、それに伴う防除適期の再検討が必要かもしれません。

3. 簡易調査に向けた取り組み

調査対象病害虫の増加などによる業務の増加により、病害虫防除所の負担が近年大きくなっています。こうした状況の中、病害虫の巡回調査では効率的で精度が高い調査が求められています。現在、農林水産省の委託プロジェクト「収益力向上のための研究開発」の中で、われわれはダイ

ズカメムシ類を対象とした発生予察の高度化に取り組んでいます。

ミナミアオカメムシやアオクサカメムシは光に集まるという性質（走光性）を持つことから、この現象を利用した調査法の開発に取り組んでいます。これらのカメムシは光の波長（色）により誘引性が異なり、人間の目には見えない紫外光に強く誘引されます。そこで、カメムシが好む紫外光を発するLEDを使用したライトトラップを開発しました（図4）。開発したLEDトラップはバッテリーで稼働できることから、電源を使用することが難しい野外圃場などにも設置ができます。現在、開発したトラップをカメムシが問題となっている現地圃場に設置し、発生予察への利用法を検討しています。



図4 開発したLEDトラップ（右上：点灯時）

ホソヘリカメムシやイチモンジカメムシに関しては、雄成虫が放出するフェロモン成分が明らかになっており、これらの誘引成分を利用した調査法の開発を進めています。これまでの試験で、トラップの設置高が捕獲効率に影響を与えており、設置高が低いほど捕獲数が多いことが明らかになってきました。

今後、LEDやフェロモントラップへの誘殺数とダイズ圃場での発生量や被害との関係を解析することにより、発生予察に向けた利用条件が明らかになっていくものと思われます。また、プロジェクトの中で得られた成果については、ダイズカメムシ類の対策マニュアルとして取りまとめることになっていますので、成果を皆様にご報告できる日も近いかと思えます。

（農研機構中央農業研究センター北陸研究拠点 遠藤 信幸）

植防一口メモ

猛暑と害虫

今年の夏は一段と暑い夏でした。三条市では台風のフェーン現象により、7月29日に39.5℃、8月23日には40.4℃まで気温が上昇しました。高温少雨により、例年以上にこまめな農作物管理が求められた夏でした。

このような中、病害虫にも例年と違う動きが見られました。三条市では大豆の鱗翅目害虫が7月から9月頃まで多発生しました。ほ場に入ると身体に数頭付着し、また大豆の上位葉が葉脈だけになっている株もありました。主に見られたのは、ツメクサガやヨトウ類、ヨモギエダシャクでした。

これら害虫への追加防除を検討しましたが、8月の基幹防除で対応できるとの判断で行いませんでした。

例年、問題にならない病害虫でも気象条件により被害が拡大することを改めて認識しました。また、気象が不安定となる中、マイナー病害虫でも防除適期や要防除水準の検討が必要であるとも感じました。

（三条普及指導センター 澤田 勝則）

AIを活用した病害虫診断技術の開発について

1 はじめに

近年、モニタリングセンサーやスマートフォンなど情報機器の進展により農業分野でも情報通信技術（ICT）を活用したハウス施設の環境制御等が容易に行われるようになってきました。



人工知能（AI）はICTの1つで、篤農家（とくのうか）の高度な技術、知識をAIが覚えることで、誰でも利用可能な技術としてマニュアル化し、伝えていくことができるようになります。

このAIを病害虫の診断に活用するための技術開発が行われています。具体的には、病害虫の症状をスマートフォン等で撮るだけで病害虫診断をしてくれる、といったことを目指しています。

2 診断システムの構築のために

（国研）農研機構生活支援センター委託事業（戦略的プロジェクト推進事業）「人工知能未来農業創造プロジェクト」の支援を受けて、農研機構が中心となりトマト、ナス、キュウリ、イチゴの病害虫について診断システムの開発を行っています。

表 AIを活用した病害虫診断の対象病害虫（新潟県・トマト）

病 害	虫 害
青 枯 病	ネコブセンチュウ
褐色根腐病	ヒラズハナアザミウマ
うどんこ病	コ ナ ジ ラ ミ
葉 か び 病	ト マ ト サ ビ ダ ニ
すすかび病	
灰色かび病	

AIに病害虫を覚えさせるためには膨大な量の教師画像が必要です。このため農研機構および23の都府県がトマト、ナス、キュウリ、イチゴの病害虫を分担して撮影、収集しています。その中で新潟県はトマトを担当し、表のとおり新潟県内で発生の多い10種類の病害虫について画像の収集を行っています。

3 これまでの状況と課題

新潟県農業総合研究所基盤研究部と園芸研究センターでは、これまでに表のうちの5種類の病害虫について、菌の接種、虫の放虫により発病・加害させ、被害程度別に写真を撮影してきました。しかしAIに学習させていくうちに、背景に他の葉や老化・黄化した葉、余計なもの（ラベルや暖房機のダクトなど）が入ったり、画像を拡大したときに

ピントが合っていない極小昆虫等の画像は教師画像には向かないことが分かってきました。



一方、先行して研究しているキュウリでは、葉に病徴を示す限られた

写真 教師画像の例（トマトうどんこ病）

病害については診断結果の精度向上が認められました。今後は他の部位の病徴や虫害に対しても画像を収集し、診断能がさらに向上すると思われます。

4 おわりに

昨今、AIの進展により「多くの仕事がAIに置き換えられるのではないか」と言われています。

実際ニュース等でも、これまで人が長時間かけていた事務処理をAIが瞬く間に行なったとか、レントゲンなどの診断結果をAIが瞬時に出すなどといった話を聞くようになりました。

将来は、ドローンの小型カメラ等で病害虫を発見、撮影し、診断した後に薬剤散布をするといった一連の流れが全てAI等により自動で行えるようになる日がくるかもしれません。

（園芸研究センター 宮嶋 一郎）

みちくさ

新潟で仕事を始めて

東北の片田舎から新潟に就職しまして、20年を越え、人生の中で一番長く住んでいる場所になりました。初めて新潟で食べたお米の味は忘れられません。（今ではそれが当たり前になってしまいましたが）

新潟での仕事の中で県民の食、特に味に対するこだわりは、ずば抜けて高いと感じています。

5月連休明けから10月まで続くえだまめ、漬け用、焼き用等多種多様なナスなど、作付面積は多いが県外への出荷が少ないところから、高くてもうまいものを自分で作って食べるのが県民性と感じています。

この味へのこだわりが米王国へ繋がったと確信しています。

この味にこだわる新潟の中で県民の口に合う農作物栽培にこれからも微力ながら貢献できるよう努力していきます。

（北越農事株式会社 黒滝 貴美）

平成30年度主要農作物病害虫の発生概況

病害虫防除所では普通作物、園芸作物（果樹・野菜）の病害虫発生実態調査を行っています。平成30年度の主要病害虫及び特徴的な発生があった病害虫について紹介します。

1 水稻の病害虫

(1) いもち病

葉いもちの初発確認は7月2日で平年比遅くなりました。7月第5半旬には稀～少発生しましたが、高温少雨に推移したため発病は抑制され、上位葉の病斑はほとんど確認されませんでした。発生量は平年比やや少なくなりました。

穂いもちの初確認は8月14日で平年比遅くなりました。8月下旬から稀～少発生しましたが、発病程度は軽度で、全般には平年比少ない発生でした。出穂期頃に降雨があった晩生品種の新之助は比較的高頻度で発生しました。

(2) 紋枯病

初発確認は7月9日で平年より遅く、8月下旬まで発生量は平年比やや少なくて推移しました。8月下旬の多雨により病勢進展し、9月上旬には一部で止葉の枯死がみられ、中発生ほ場が散見されました。例年より中生～晩生品種で発病が目立ち、平年比やや多い発生となりました。

(3) 斑点米カメムシ類

6月下旬～7月上旬の畦畔雑草地における斑点米カメムシ類の生息密度はほぼ平年並でした。出穂期以降の降雨・低温により斑点米カメムシ類の活動が抑制され、水田内の生息密度は平年並～やや少なくて推移しました。斑点米被害はカスミカメムシ類による加害が主体で、早生品種や雑草管理が不十分なほ場で目立ちましたが、検査等級格落ち率（10月末現在）は全般に平年比少なくなりました。

(4) その他の病害虫

育苗期の病害は、ばか苗病が各地で発生し発生箱数の過半を占めました。全般に平年並～やや少ない発生でした。ごま葉枯病は8月上旬から各地で稀～少発生しましたが、上位葉への進展が抑制され、穂枯れの発生も少なく、発生量は平年比やや少なくなりました。縞葉枯病が平成21年度以来、局所発生しました。害虫は、イネドロオイムシの被害が常発地で目立ち、コバネイナゴは各地で少発生し、平年比多い発生でした。ニカメイチュウの被害は平年並、セジロウカは飛来数が少なく増殖率も高まらず、平年比やや少ない発生でした。

2 大豆の病害虫

生育期は、食葉性鱗翅目幼虫の被害が7月上旬から各地で多～甚発生し、平年比やや多い発生でした。一部では8月上旬に上位葉の食害が激しい被害がみられました。前年発生が多かった葉焼病やウコンノメイガは平年比やや少ない発生でした。

子実被害粒は全般には平年並～やや少ない発生でしたが、シロイチモジマダラメイガは平年比多く、カメムシ類は平年比やや多くなりました。

3 果樹の病害虫

(1) なしの病害虫

黒斑病は平年比やや少ない発生でした。黒星病は平年より早く5月上旬から発生し、8月下旬には多～甚発生も散

見され、平年比多い発生となりました。近年発生の多かったセイヨウナシ褐色斑点病は防除対策が徹底され、一部で甚発生しましたが、平年比やや少ない発生でした。

害虫は、ニセナシサビダニの被害が平年より早く5月上旬から発生し、5月下旬から被害が急増し、平年比多い発生となりました。西洋なしで本種の寄生を初確認したため特殊報を発表しました。春先の高温や6～7月の高温少雨により増殖が助長され、ナシヒメシンクイの果実被害は平年比やや多く、ハダニ類は甚発生が散見され平年比多い発生となりました。

(2) ももの病害虫

せん孔細菌病は5月上旬の春型枝病斑が多く、発病葉の発生が平年比多かったため、5月11日に注意報を発表しました。発病葉は7月上旬まで平年比多く推移しましたが、その後病勢が停滞し全般には平年並の発生でした。果実発病は袋かけ前の感染が助長されたため、平年比やや多い発生となりました。ハダニ類は6～7月の高温少雨により増殖が助長され、8月上旬には多くが甚発生し発生量は平年比多くなりました。

(3) ぶどう・かきの病害虫

ブドウべと病は平年より早く6月上旬から発生したため、6月7日に速報を発表しました。6～7月の高温少雨により発病は抑制され、全般に平年並の発生でしたが、9月下旬に一部で甚発生し落葉が目立つほ場がみられました。灰色かび病は8月中旬以降の多雨により果房発病が平年比多くなりました。ぶどうのチャノキイロアザミウマは、夏期の高温により増殖が助長され平年比やや多い発生でした。カキ円星落葉病は6月の降雨で感染が助長され、平年比多い発生でした。

(4) 果樹カメムシ類

前年のスギ穂果量は平年並でカメムシ類の越冬密度は平年並と推測され、予察灯等への誘殺数も概ね平年並で推移しました。なし、もも、かきの被害果はともに平年並の発生でした。

4 野菜の病害虫

(1) 冬春トマトの病害虫

3月～5月が高温に推移したため、灰色かび病は平年並、葉かび病は平年比やや少ない発生でした。アザミウマ類の寄生は平年並でしたが、3月下旬から果実被害がみられ、一部では中発生しました。

(2) 夏秋きゅうりの病害虫

褐斑病は8月下旬から発生し、過湿条件下で多～甚発生ほ場が散見され、発生量は平年比多くなりました。べと病、うどんこ病は平年並の発生でしたが、一部で多～甚発生しました。ハダニ類は8月下旬の高温により増殖が助長され、平年比多い発生でした。

(3) 秋冬ねぎの病害虫

ネギアザミウマの被害は全般に平年並でしたが、7月上旬から各地で多～甚発生しました。産雄単為生殖型の分布が拡大傾向にあります。シロイチモジヨトウは成虫飛来量が多く、7月下旬から各地で幼虫被害が発生し、平年比やや多い発生でした。

(新潟県病害虫防除所 山口 吉博)

「農薬実証ほ成績の概要について」

平成30年度の農薬実証ほでは、殺菌・殺虫剤16剤、除草剤14剤の合計30剤を延べ37か所で実証しました。普及性は、地域で使用されている薬剤と防除効果や作業性を比較して総合的に評価しています。12月7日に成績検討会が開催され、検討の結果、それぞれの薬剤の総合評価が決定されましたので、その概要をお知らせします。

水稲の殺菌剤では、いもち病、イネドロオイムシ、イネミズゾウムシを対象とした直播における粒剤の側条施薬、穂いもちを対象とした水面施用剤、紋枯病を対象とした箱施用剤の効果が確認されました。殺虫剤では、イネミズゾウムシ、フタオビコヤガを対象とした箱処理剤の効果が確認されました。

水稲用除草剤では、移植水稲の初中期一発剤9剤、中後期剤2剤の実証が行われ、ホタルイに対する効果が確認できなかった剤が1剤ありましたが、それ以外は効果が確認されました。

大豆用除草剤では、一年生広葉雑草を対象とした薬剤の効果が確認されました。

大麦用除草剤では、一年生雑草を対象とした薬剤の効果が確認されました。

野菜では、ねぎのネギハモグリバエ、アザミウマ類、かぼちゃのうどんこ病、いちごのうどんこ病、きゅうりのア

ブラムシ類、コナジラミ類、うどんこ病、灰色かび病、キャベツのハスモンヨトウ、アザミウマ類、ヨトウムシ類、アブラムシ類、コナガ、アオムシ、ハイマダラノメイガ、ウワバ類、ネキリムシ類を対象とした実証が行われ、いずれも効果が確認されました。

果樹では、ぶどうの晩腐病、灰色かび病、クビアカスカシバ、もものアブラムシ類、カイガラムシ類、かきのカイガラムシ類、いちじくのカミキリムシ類、なしのアブラムシ類、カイガラムシ類を対象とした実証が行われ、実証剤の効果が確認されました。

検討の結果、実施機関1か所以上で普及性が高い、または、普及性があると評価された農薬は29剤で、表1～表4のとおりになります。

いずれの作物においても、それぞれの地域で近年問題となっている病害虫や雑草を中心に実証剤の普及性が評価されました。実証剤の中には既存の薬剤と作用機作の異なる新規成分の薬剤もあり、薬剤選択の幅が広がって、薬剤抵抗性病害虫対策としての「作用機作の異なる薬剤のローテーション散布」にも活用されると期待されます。今後、各地域の防除体系に組み込んで、生産現場で速やかに活用されることが望まれます。

(事務局)

表1 普通作物殺虫殺菌剤

薬剤名	作物名	病害虫名
Dr.オリゼフェルテラ粒剤	水稲(直播)	いもち病、イネドロオイムシ、イネミズゾウムシ
ゴウケツ粒剤	水稲	穂いもち
ファーストオリゼパディート粒剤	水稲	イネミズゾウムシ、フタオビコヤガ
ルーチンブライト箱粒剤	水稲	紋枯病

表2 普通作物除草剤

薬剤名	作物名	処理方法等	成分数
エンペラー1キロ粒剤	水稲	初中期一発剤	3
ヤブサメ豆つぶ250	水稲	初中期一発剤	3
センイチMXジャンボ(フルパワー-MXジャンボ)	水稲	初中期一発剤	3
ピンワンフロアブル	水稲	初中期一発剤	3
ツルギフロアブル	水稲	初中期一発剤	3
ベンケイジャンボ	水稲	初中期一発剤	3
ゴウワンDLジャンボ	水稲	初中期一発剤	5
アップレZジャンボ	水稲	初中期一発剤	3
ピンワンジャンボ	水稲	初中期一発剤	3
ゲバード1キロ粒剤	水稲	中後期剤	4
トドメMF1キロ粒剤	水稲	後期剤	1
アタックショット乳剤	だいず	一年生広葉雑草	1
リベレーターフロアブル	大麦	一年生雑草	2

表3 野菜殺虫殺菌剤

薬剤名	作物名	病害虫名
ファインセーブフロアブル	ねぎ	ネギハモグリバエ、アザミウマ類
プロパティフロアブル	かぼちゃ	うどんこ病
オルフィンフロアブル	いちご	うどんこ病
トランスファームフロアブル	きゅうり	アブラムシ類、コナジラミ類
ベリマークSC	キャベツ	ヨトウムシ類、コナガ、アオムシ、ウワバ類
ラミック顆粒水和剤	きゅうり	うどんこ病、灰色かび病

表4 果樹殺虫殺菌剤

薬剤名	作物名	病害虫名
セイビアーフロアブル20	ぶどう	晩腐病、灰色かび病
モベントフロアブル	もも	アブラムシ類、カイガラムシ類
モベントフロアブル	かき	カイガラムシ類
ロビンフード	ぶどう	クビアカスカシバ
ロビンフード	いちじく	カミキリムシ類
トランスファームフロアブル	なし	アブラムシ類、カイガラムシ類

村上市朝日地区における無人ヘリコプターとドローンを併用した共同防除体制について

【はじめに】

村上市朝日地区では、平成8年に旧朝日村で無人ヘリコプターを導入以来、委託による無人ヘリコプター防除を基本とし、危険箇所は地元防除班によるラジコン動噴で補完散布をしながら防除作業を実施しております。

近年、栽培方法や作付品種の多様化に伴い、共同防除では防除適期を逃してしまうとの観点から、大規模農家や生産法人が個人防除へ移行し、共同防除区域内に個人防除耕作地が点在している状態になってきているという現状があります。

【ドローンの共同防除活用】

今年度、朝日地区では大規模農家を中心にドローンの導入が相次ぎました。導入理由としては、先に述べた栽培方法や作付品種の多様化に対応した適期防除を実施するためや、これまで使用してきたラジコン動噴による防除作業の労力軽減などがあげられます。しかしながらドローンの導入にあたっては、共同防除から個人防除対応への動きがさらに加速し、これまでの共同防除体制が崩れてしまうのではないかと懸念がありました。

そこで、村上市病害虫防除協議会朝日支部事務局である行政の担当者がドローン導入農家の元へ赴き、ドローンの稼働計画や、今後の共同防除との関わり方などを聞き取り、今後の対応を考えることにしました。ドローン導入農家からは「共同防除は病害虫を面的に一斉に防除する効果的手段なので、共同防除体制が崩れることのないよう協力していきたい」という意見もあり、共同防除体制の見直しについて同事務局で検討を重ねました。

その後、同事務局で散布区域割り等の事務を行っているNOSAI新潟県下越支所の担当者がドローン導入農家と面談し、一日の稼働予定面積や、危険箇所等の散布についての対応などを聞き取り、共同防除体制の再構築を行いました。

その結果、共同防除区域のうちドローン導入農家の耕作地が大半を占める区域においては、これまでの無人ヘリコプターによる共同防除をドローンに変更し、当該区域の散布作業をドローン導入農家へ委託することにしました。

また、ドローン導入農家の出作地においては、ドローンによる個人防除の点在を回避するため、無人ヘリコプターによる共同防除の実施に同意していただきました。危険箇所については、無人ヘリコプターと同様に、地元防除班によるラジコン動噴または背動散での補完散布を行うこととし、無人ヘリコプターとドローンを併用した新たな共同防除体制のもとでの散布作業実施となりました。

【これからの共同防除体制】

ドローンの散布作業については、一日一機当たり、概ね20ヘクタールほどの散布実績となりました。どの程度の面

積を散布できるのか不透明なところもありましたが、作業も早朝から始めて昼頃には終了し、予想を上回る稼働状況となりました。



ドローン導入農家が共同防除から離脱することによって今後の共同防除体制をどのように維持していくのが悩みの種でありましたが、ドローン導入農家と協力して無人ヘリコプターとドローンを併用した共同防除体制を推進し、地域一体となって高品質な岩船米の生産に取り組んでいきたいと考えております。

今後、ドローンがますます普及していくと思われませんが、こうした協力体制がこれからの共同防除のモデルケースになるのではないかと考えます。

【次年度に向けた対応】

今年度、初めて無人ヘリコプターとドローンを併用した共同防除を実施しましたが、隣接する区域で無人ヘリコプターとドローンの飛行経路がバッティングしそうになり、散布作業が一時中断するなど、お互い作業に支障をきたした場面もありました。次年度は無人ヘリコプター業者とドローン散布農家を一堂に会した会議を開催し、防除日程の共有や当日の散布作業内容の確認などを徹底し、安全な防除作業に努めていきたいと考えております。

(NOSAI新潟県下越支所 事業第1課 鈴木 和紀)

編集後記

- 新年明けましておめでとうございます。本年も「にいがた植防だより」をよろしくお願い申し上げます。
- 昨年12月に北陸農政局から発表された新潟県の作況指数は95の「やや不良」、台風による潮風害や日照不足などの影響し、前年の96を下回ったとのこと。
- 当誌前号でも触れましたが、夏期の猛暑・寡雨に加えて8月下旬以降の日照不足傾向や台風など天候不良が登熟に影響したようで、近年の温暖化や異常気象が顕在化。病害虫防除は産業用無人ヘリを主体に円滑に実施され、病害虫の発生は全般的に抑制された。
- 県内でも、マルチローターなど無人航空機の導入・利用が増加中、今後、規制改革推進会議の答申などを受け、ドローンを巡る規制の見直しや自動化の検討が活発化していく模様。現場農業者の立場に立ち、地域住民にも受け入れられるような検討を是非ともお願いしたい。(事務局)